和田定節編
開明轉

小說

春雨文庫

第六號

下

春雨文庫第六編卷之下

東京　和田定節　著

○第二十三回

花の爛漫たるも見樣ふ因てハ無常の感と發し月の麗朗さるも心ふ愁へあるときハ哀れと誘ふ媒妁とやるらんお梅い吉太郎よりの便りを得て嬉しさ限り無く使ひの者と饗應し京都の容子を詳しく聞んと為しふ今夜中ふ是非とも

A448
12
010190508310
48-7544

江戸へ往ねば成らぬとて尻残落着ぬ内酒代と
與えて是を帰せし後いそぎうの包を奥の小
座敷へ持ちき燈火の下ふ油紙を解ふでー先書状
を開きて見るふ世の中へ何とるく騒々ーけれど
も日々潔よく勤て居り同役の人々ふひく家内と
引纏ゆもだ折と見合せ呼迎へふ下るとの事ぐ細
々書てあり且西陣ふて云々の品を求めたもだ送
るとの相も憂らね艶ーさへ身ふ染渡る嬉ーさ
と包むふ餘る帯地髪かけ繻絆の袖口半襟ふ時ー
分さね春の花秋の紅葉と宛然ふ敷散ーたる如
くあり然もだふ梅へ枝の色々の美ーきを打ね
ぐめまーと吉太郎の厚き意と思ひ夢心地ふく有
りけるぐ不斗氣ぐはき帯地の切とてふ採りく
溜息ぢるぐ「紺地の本國ぢりへ蘭の模様と織
出ーさん誰ふ見せてゆすず冠の無品ゐれど世の中
ぐ騒々ーいの下京都へ護衛ふ出の吉太郎さん

のお身ゐ取と本國おりの蘭の模様が本國の亂と
變り再さび江戸や横濱へいこん地と言ふ辻占ろ
と愚癡る心ゐ案じてゑると繻絆の袖口や髪か
けの切の鋲砲絞りキシャゴ絞りも互ひゐ擊あふ
鋲砲ちがり槍を接ちる騎者伍ちがりゐ成い仕
舞うときゐ掛り又ちの半袗い浅黄地ゐ朝顔と
秋の蝶の縫とり模様朝がゐい敢果るいをの〳〵
限りよ比へ秋の蝶の翌日をも知れぬト言かけ。ホロ

リと泪と飜ーつ差し伏むいて居ろうしが思ひ忘
れ様としく表を詠めねて居て待つ果報ようい増
て嬉しい京都の便りゐ此種々を戴いさい勿体ゐい
とも有がらいとも お禮の申し様いるい程なれど
今日の嬉しいお送り物が後の悲しい辻占の知らせ
ゐ成りい為まいうと思ふと此おて紙ゐ書て被遣
の通り一刻も早く迎ひのお下りゐるり御一所
ゐ京都で暮したら仮令その地ゐ戦争が始ま

り兵糧のお握飯や草鞋の紐のお世話とし若し萬一の事が有ら〳〵此身も共ふ死で仕舞女の道へ立るゐれど何と言ふも懸隔ッて居るぢうで無く未ざ表向き親と親とふ許されと夫婦で無かう誰やらの歌ふ。羨やま人目なき野のきりぐに鳴も心の儘るぬ身へと有通り嬉しい事ぐ有れべあるで悲しい思ひのまして来るへ鳴虫とやらふ取り附きでも為さのうと彼を思ひ是を

案ど涙ふ濡る袖を噛を獨り愁然たりける折から廊下ふ破多〳〵足音して「マアお梅さんへ先刻から何處へ隠れん坊とし〳〵仕舞さのうと思つさら此處ふ閉籠り乍ら京都の事を考え塞ぎの虫てお出るさるうと言ひるぐ〳〵入り口の障子を明るお松の姿ふお梅へ早く書状を隠しオヤお松さんお忙がしいふも構へす此様るとろふ逃込んぐ居てお氣の毒さ又然ぐマア一寸御

お梅吉大郎
よりの贈物を
分配す

覧なさい京都の染の綺羅なとと「松」ホンニまア美しい
絞りで有ます祐人然しく此帯の宜て是ゞ真正の
澁いと言ふのゞい夫ふまア半襟の意氣な事定め
し彼の人からでせうゞ羨ましいぢやア有ませんろ
何様きりやア渡邊さんの此様ふ寶ゞ有て優しい
ぞらゝとお梅の顔と見詰て居るお梅の泣顔をお
松ふ見せじと明り障斜ふ身をそむけ「アレ否ゞ
よノ珠らしくも無顔をサ「松」夫でも渡邊さんゞ何

處の愛敬ふ惚さうと思つてサ「梅」又おいぢめゞョ夫
ぞゞ子矢張お品ハ渡邊さんからお遣しのゞく
帯ハお宅へ屆けて上るのゞゞ半掛や袖口ハお松さ
んやお竹さんふも上て呉ろと言て被遣のゞから
中よく分て戴きませう祐人ト聞きお松ハ莞示く
顔「オヤお梅さん真正ふさうマア嬉しいねへト鼠鳴き
ゝ折ゝ小用所へ往酔酔客ゞ廊下を通りゑがら
「ハシ」吉く遣りやァがるぜ畜生め

○東福寺の鐘ハ丑刻を打切り四邊やうやく寂漠たる時入り口のとを広の先ゆて竊ゝふトン〳〵と扣けば内より「唯と言ひ立出で掛鋏外し〳〵戸を細めに明ケ「且那でござい外ゝと小声で言ハ「應自已ごとの答へも竊ゝに其方此方見まハし内へ這入り〳〵戸締り做し上りなば〳〵「今日ハ餘り遅くなり〳〵而已ならず世の中も煽動の火のてゞ強いので段々沸騰ゝて来とから来めへと思つさゞ其事を心得させて置てへので一寸抜て来さのゞ酒ハ有ゝ「オヲ万一お往も有ゝと存じお支度を為て置まーさから直ゝお燗を附ませう「开アやァ有がてへ然ゞお鍋ハ眠り込んざるゝ寐さまゝふーて置ゞ宜とふハ召使ひの下女のとるべー又此處ゝ来りしハ新撰組の頭近藤勇ゝ〳〵此所ハ彼の妻ゝ美弥の隠れ家るゝゝ美弥ハ勇の来る夜も来ぬ夜も酒の支度を為ー下女ハ先へ寐させ其身ハ寅刻ごろ迄

臥床ふいらず待て居れを直ふ酒の燗をしく些
の者を添出しける由名勇ハ數盃を傾けるゞ勇
酒ハ一日菓の長とハ斯ハ時ふ飲の故言ことのゞら
う漸こまとく肴ゞ開いてすと去来お前も一盃のま
祿へくゞ戴きませうう祿ハ然ゞ前の一ッで大造醉
まーさッ醉さあひどゞ極楽ゞ世の中ハさらぬゞ
ふ飛鳥川の淵瀬の變り易きふ譬へて有るとま
ーてやるゝ日の景況ハ真事ふ七色蕃菽で辛い

と思へべ甘く成るその時々の匙加減ふハ困りき
る夫を思ふと飲べーサ此度ハさの大きいの人次で
貰ハう美アレまア小さい方ふーーふ置るさいまーョ
ヲと酌を為るゞ美アノヲ今日ハ何ざうお上ゞ誤多
ばくでハ有ませんう勇其事ョ是まで長州藩ゞ大
さうふ威を振ッて居さところゞ今日急ふ毛利讃
岐守吉川監物益田衛門の三將ふて人數をひきい
固めて居さ堺町御門の守護を免ぜられさのゞ

此件文久三年八月十八日の事なり
彼の藩士らが大いに是と激怒るのゝるらず七卿
も又怒をさまひ
此時七卿と称せしは三條黄門實美卿（今の太
政大臣）三條西中納言季知卿 東久世少将通禧
卿 四條侍従隆謌卿 壬生修理大夫基修卿 錦小
路右馬頭頼徳卿 澤主水正宣嘉なり
忍びゝに長州の藩士らが隊中へ加わり給ひし

容子なれど堺町御門に會津桑名とうの藩士交
代して是と護衛し我新撰組なぞの者も事あら
ば其應援を做んと各戦ひの准備をして待かけ
今にも事起らんとせる有様なれど此後に至
りては一隊中も離れられぬ故土方を頼を
徐と援るきさい若し事あつて此地が合戦の街
巷となり砲声急に鎮まらぬ或ひは放火なぞ
の為に此住居を焼れもしなば豫て話しして置

たる通り粟田口の裏山をへて近江へいで石山の
觀音を目あてゐ聞往きの隱れ家ゐ容子を窺
ひ居り我討死せーといふ評あらを速やゐ大藏
村へゐり江戸へゐり下るべー然さが合戰ゐい甚ざ
浮説の多きをの故人の話ー我迂闊ゐ信仰いゐ
ーがさー其ちゐい僕が今下らゐく死で仕舞と
折角の思ひで女房ゐーさ人を表向の廣めもせ
ず置く往て仕舞ゐければ成らゐいうート言ひ

ゐ美弥の顔を見れをゐ美弥もまーさ勇の顔を ゐ
つと見詰て居さりしが愁然として溜息つき イヤ エ
若ー合戰が始まつて貴君がゐ討死でもゐさる
様ゐ事が有ると吾儕い江戸へい參りません ワ 開
ーく何處へちく ア 美 ゐ後から追附冥土とやらのゐ
供を致ーますから何卒連て往て下さいまーゐ
イヤ 勇 詰ら於人事ゐ言ふ折角の酒がりゐ落てゐ
旨くゐーー先々左様ゐとい時の相場ゐ任せて置

として最一盃次ぐ貰たう美夫でも貴君ゞ若討
死ちそうるんのと哀しい事と被仰からサ勇ゞ實ゞ
くく左様夫でい去来合戦と聞くく巴御前や班額
女の様ゞ敵軍へ討てへり新撰組ゞい女将軍あ
りと人の恐まるやうゞして貰ひくゞゞ夫でい何
様ぞ美ゞんゞ世間の人ゞ大藏村で剣術を遣つ
さ二子の重六の様ゞ弱いと直ゞ出て苛い目ゞ
遇してやりまんゞゞ祢エ併貴君ゞ連て出てさへ

下さりやァ掛替の砲や兵粮ぐくるゞ擔いで往きまして
悔しい祢エ何卒ゞ供を為せて下さいきまし。エ隨分働
きますからサ勇イヤ待巴御前や班額女の様ゞ働い
て貰ゞん宜ゞ和田義盛や浅利與市ゞ生捕れ向
ふの者ゞ為れちやァ種すりざから鉄砲擔ぎも兵
粮持も止して矢張自己とだく合戦とくく置
とと極て仕舞美オホ〳〵左様そると買續けて勝
ことゞ〳〵も出来ません祢エ勇左様でも祢〳〵人の家

近藤勇
妻の隠れ
家へ来

い詰り智恵の有るとうゞ上ゐ立から仕舞ゐい
自己のとうゞ組伏られ尻ゐ敷れて仕舞ゐどうう
「エヤア憎らしい何時吾倩ゞ尻ゐ敷きゝとエと勃ゐ
ゐり勇の膝へ膝はき附て摺よれを勇い猪口を
持とる手と除「是サ浮山氣るゐ串戯を為るゝ酒
ゞ飜きるゥ「夫でも他の事と違ひ腹ゞ立でい有
生せんゝ「どうせ笑ひ顔をゐゝ側へ来る氣遣ひ
い無いうゝ怒らして斯様ゐ風ゐ摺り寄せるの

謀計ざアと口の内ゐて唄ふ都々一「用ゞ有とて呼ざ
い嘘よお顔見ささの計り事ッ「ゐんゐ否る新撰組
のお頭さまざお人品ゐ似あはるい意氣ゐ声を出ー
たゝ女を焦すのゞお上手ざうゝ色男のお頭さゐ
ゐお役がへと成さいまーナ「お前ゞ惚てさ人呉れで
何役ゐでも直ゐ成のサ「此うへ最と惚さるゝ氣
ゞ狂ッて仕舞升ざうう絃エと真面目ゐるゝ勇の
顔とゝて居れば勇い莞示「箆ざうゝ

○第廿四回

四條南の大芝居このごろ江戸や大坂から登り役者の顔揃ひとく近来稀なる當りを為し日毎ふ運ぶ人の足人の山なす大入へ行得都會の花みうけり髪ふ小常の一ト群へ田原屋清兵衛が長門へ下る心の暇乞の留別ありとも知らず一時の奢りと思ふも名今日晴着の伊達衣裳髪の飾りも花美やうふ粧ひとく朝まだきより出うけ来りし芝居茶屋江戸屋の二階此家へ兼て田原屋の恃をはけるみれど只さへ扱ひの鄭重なると清兵衛ふ託さを此日の事ゑ引請居まだ柊屋寅吉がとうとひふく土産纏頭も行屆くふ亭主へ元より下婢料理場送り迎ひの若い者らが世辞軽薄のて厚さい黄金の利益と知られたり若者へイ今日へ宜うふ出ますと何やら世間へ混雑でるのでおまけにがるア仕合るとふへ今度も

まゝ大景氣で桟敷土間へ猶さら簾引船まで毛氈のかゝる程も忘寝ふ骨ゞ折まゝされど外さまと違ひ御見負厚い横田さんの事なれも梢く上等の場と取りまゝ只今御案内いたゝまたト言ふうち出す茶草煙盆小常い常番常づると帯るどメかへ支度ゝく居る程もなく迎ひふ来る茶屋の男ふ連られく各桟敷へ到りけり此時寅吉い用ふ仮枕あとふ残りゝゞ小常らゞ忙々と足元世話ゝく芝居の木戸を這入り往く後影見おくりて一人何やら黙頭ッ一寸買ものを為て来るとて茶屋を出ゝゞ急ぎ此裏町ふ住む目明ゝ玄藏の家へ到り門口あけて首さゝ入れ「親方いお内ゝ子と言べ玄藏へ火鉢のそでふ居ゝくおて「寅さんゝ上んゝるせへ」自已ア留守ゝと思つて案事て来さゞ占さくゝと言ひゝゞゝ上り込ゝ「此二三日へ猶々騒々ゝいとの評判ざのふ能く

居さるア「亥」今までハ西風ガ強いので自已ちも尻
尾を巻き成り丈け其鼻息を除く居さガ此程
ハ到り攘夷ゞの鎖港ゞのと言ふてハ當時の世
界の景況でハ迚も出来ぬ譯ガ関白さゝを始め
諸卿方へ知れさので又東風ハ吹かべーさーも今
まで勢ひを張て居さ長州の三大将毛利讃岐守
さドわきのての者一同ガ堺町御門のお固めを
上られると三條さゝ其餘の六卿ガ此人數と一
ウハ成りての大怒り夫ハ附ちやア勤王を名とし
て世の中を騒ガすつらい共を盡く縛め捕く仕
舞しの守護職會津侯や所司代桑名侯の御下
知ハよう自已さちのお頭とする町奉行ハ元より
見廻り組でも新撰組でもてハてを盡す最中ゞ
から今朝らア安閑として内ハやア居られ給へのゞ
ガお前から言込んゞ話しの奴さんガいよ〳〵出掛く
来さう何様で有うと思ひ待て居さのゞア「寅」左

様であつさり開りやァ氣の毒るあらー小常の連
中いかねて話ーと通り自巳ゞ今日の総奉行ざ
から誘ひ出して首尾よく芝居へ嵌こんで来さ
ゞ肝心の横印へ自分のむれの火のてゞ弱く成
さのゝ恐いのゝ何程煽動かけ勸めゝ見ても中
〻出かける景色るく事ふ因と自巳ゞ往ても隠
れて遇ねをゞ有から何でも一目論見あらうゝ
知れ後へと察ーさもあ一すその訳と尚語ー相

引出す工夫ふ仕組うからお前へ早く茶屋へか
へり小常の番を為ゝ居祢へ午刻過ぎまでふやァ
必ず方を附ると聞き寅吉へ打点頭「夫ぢやァ旨
く遣て見て呉ん祢へ今日の様る首尾へまさと
再さび無のざかゝ「玄ずと承知の介ざから模
様の附を待て居るせへ「夫るゝ玄さんドレ番人
と為ゝ居やうゝト尻引かゝげゝ帰り往べ玄藏
へ後見おくり「ホンニ老さ野郎ぢやァ祢へういくら

彼奴が横田の女房のお岩とやらを惚て居て横田を此方人らを挑揚げさせさつて誰があんる奴の言を残聞ものう然い笑ふ寅吉のやうる南瓜野郎があれべこそ此方人らの銭儲のて法きも附と言ふものドレ一走り往て来やうと言ひつ續いて出うけたり

○却説芝居いおひ〳〵を幕移るゐど人込て小常い逆上ふ耐られ爲び暫時その炎熱と醒さんと幕の間を抜てき〳〵江戸屋の二階の奥の間の縁のて摺ふ身をよせうけ風ふ吹れるぐ〳〵清兵衛が容子の此ゐど別して常るらねと何様しと事うと考えの思案ふ沈そく居る折から階子の段を踏るらし上り来るい寅吉ふて夫ふ引添ふ二りの武士小常の座敷へ入り来る寅吉い武士ふ會釋〳〵小常ふむ〳〵「おの旦那がさい清兵衛さんと豫て御貝負ふるさる方々ふてお前

ふ些特をたいとゞ有と被仰くゝお出ゐ成さゝ名
御案内を申したのゞと言れ小常い小首を傾け
ゝ居り直して身を向けさり

春雨文庫第六編巻之下終

太真遺傳

精製桐の箱入

上處女香

一廻り

賣弘所

色白艶と梅のごとく香り[illegible]

[illegible]

洗ひこの香[illegible]白粉と付ける[illegible]

[illegible]

顔の美人となるべし

為永春水精製

顔の艶を出し 髪の汚をさる

妙薬 初みどり

このくすりは髪を洗ふに[illegible]

書物并繪入讀本所

江戸京橋弥左エ門町東側中程

文永堂 大嶋屋傳右衛門

開明小説 **春雨文庫**

第四編ヨリ引續キ出版

近世の烈婦孝女乃傳説を記し面白き珍書なり

松村春輔編輯 **復古夢物語**

初編ヨリ八編マデ出版

這ハ明治太平記の前篇にて嘉永六年亜米利加使節相州浦賀へ来舶以来明治元年伏見戦争迄委しく書せし面白き書也

和田定節編輯 **參考鹿兒島新誌**

半紙本 初篇ヨリ七篇迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細に書せし第一の実録なり

東京書肆

大島屋

弥左エ門町十二番地

武田傳右衛門